クラブの過去現在未来

DJ　沖野修也

＝4＝　海外のＤＪの地位

おきの・しゅうや　1967年生まれ。ＤＪ、作曲家、執筆家。世界30カ国120都市で公演経験あり。

日本では、まだまだ単なる“踊らせ屋”として誤解されることの多いクラブＤＪですが、海外ではＤＪの社会的な地位は決して低くありません。トランス・ミュージックのＤＪ、TIESTOは、アテネ・オリンピック（2004年）の開会式でそのパフォーマンスを披露しました。選手団の入場行進をオリンピック史上初となるＤＪプレイで盛り上げ、世界で数十億の人々が目撃しました。また、13日に閉幕したロンドン・オリンピックでも、クラブ・シーンで絶大な人気を誇るアーティスト、アンダー・ワールドが開会式の音楽監督に抜擢されました。

とくにクラブ・シーンの中心地であるイギリスでは、ＤＪというものの存在感は特別です。野外の非合法パーティーが警察の取締を受けた歴史もありますが、音楽家としてのＤＪや文化を産み出す空間としてのクラブはその価値が十分に認識されているからです。

古い黒人音楽を再評価して、普及して来たイギリスのＤＪノーマン・ジェイは、イギリスの女王陛下から大英帝国勲章を授与されています（2002年）。彼は、ロンドンのクラブ・シーンで長年に渡り、イベントをオーガナイズして来ただけでなく、ラジオ番組でのＤＪプレイ、コンピレーションのリリースなども含め、ヒップ・ホップやアシッド・ジャズ、ハウス・ミュージックといった現代的なダンス・ミュージックにも多大な影響を与えてきました。その活動及び音楽文化に対する貢献が正統に評価されたのです。イギリスでは、バッキンガム宮殿の壁面にミニストリー・オブ・サウンドという老舗クラブのロゴ・マークの照射を許可したこともあります。日本で皇居壁面に何かできるとは考えられませんが、それほどクラブ・カルチャーというものに国家レベルで理解があるのです。

大英帝国勲章を授与されたＤＪノーマン・ジェイ
(Photo courtesy of Norman Jay)

最近では、フランス人ＤＪ、ディミトリー・フロム・パリも、文学・芸術の分野における功績を認められ政府から勲章を授与されるというニュースもありました。ＤＪという職業の市民権は完全に確立されているだけでなく、さらに違う次元の扱いを受けるようになってきています。つまり、海外でＤＪは、クラブ・シーンや音楽業界という枠組みを越えて国家がその存在を無視できない貴重な存在になりつつあるのかもしれません。

京都民報　８月１９日付